仙台港に救援物資

燃料需給 緩和へ

東日本大震災1週間

仙台空港も利用再開

仙台港の使用が再開され、着岸した船から救援物資が次々に陸揚げされた＝17日午後4時ごろ

東日本大震災はきょう18日で、発生から1週間となる。東北の被災地では、物資が届いた後も、ガソリンや灯油の不足が続く。仙台空港は17日、救援物資を運ぶ民間機の受け入れを再開。仙台港の一部の使用が再開され、陸揚げの作業が始まった。

仙台港の再開は、宮城県石巻市の石巻港（雲雀野地区）と仙台塩釜港（仙台港区）に次ぐ3港目。仙台港には17日午後、自衛隊の輸送艦「おおすみ」（4100トン）が入港。乗船していた食料、毛布などの救援物資を陸揚げした。

仙台空港は3500メートル滑走路のうち約1500メートルが終了。国土交通省の職員が、現在の復旧状況を確認するため、17日午後、空港ビルなどを視察した。

重機を積んだ米軍の輸送機が同空港を活用し、同日正午ごろには6機の320人が、仙台空港に到着した。

17日午前、東京電力福島第1原発3号機に水を投下する陸上自衛隊のヘリコプター。上から順に1回目、2回目、3回目の水投下（NHKニュースから）

福島第1

3号機 地上放水

自衛隊、ヘリも水投下

東日本大震災による東京電力福島第1原発の事故で、政府の原子力災害対策本部は17日午前、冷却機能が停止した3号機の使用済み燃料プールに使用済み燃料の貯蔵量を超える水を投入するため、自衛隊のヘリコプターで水を投下した。同日午後には、自衛隊の消防車両などを投入し、地上から放水する作業を始めた。燃料プールを冷却するための水を投入し、高濃度の放射性物質が外部に飛散するのを防ぐ狙いがある。ヘリによる放水は、午前9時40分ごろから、7回にわたり実施。陸上自衛隊のヘリ3機が計4回、海上保安庁のヘリ1機が1回、それぞれ上空から3号機に水を投下した。

ヘリによる放水は、3号機の使用済み燃料プールの水位が低下し、燃料棒が露出して損傷し、放射性物質が大量に放出される恐れがあるため。ヘリは、3号機の原子炉建屋の上空まで近づき、ホバリング（空中停止）しながら、1回当たり約7トンの水を投下した。

一方、地震で失われた外部電源の復旧作業も進められ、3号機の原子炉の冷却機能を回復させるため、仮設の電源設備の設置作業を始めた。

東京電力によると、3号機の使用済み燃料プールの水の蒸発が進んでいるとみられ、燃料棒が露出する恐れがあるため、海水を直接入れる作業を優先させることにした。市ガス導入の準備が整い次第、プールへの注水を再開する。

1、2号機でも冷却機能が停止しており、冷却機能の回復を急ぐ。

東京電力福島第1原発の事故で、政府の原子力災害対策本部は17日午前、冷却機能が停止した3号機の使用済み燃料プールに使用済み燃料の貯蔵量を超える水を投入するため、自衛隊のヘリコプターで水を投下した。同日午後には、自衛隊の消防車両などを投入し、地上から放水する作業を始めた。燃料プールを冷却するための水を投入し、高濃度の放射性物質が外部に飛散するのを防ぐ狙いがある。ヘリによる放水は、午前9時40分ごろから、7回にわたり実施。陸上自衛隊のヘリ3機が計4回、海上保安庁のヘリ1機が1回、それぞれ上空から3号機に水を投下した。

ヘリによる放水は、3号機の使用済み燃料プールの水位が低下し、燃料棒が露出して損傷し、放射性物質が大量に放出される恐れがあるため。ヘリは、3号機の原子炉建屋の上空まで近づき、ホバリング（空中停止）しながら、1回当たり約7トンの水を投下した。

地上からは、自衛隊が保有する高圧放水車3台と、ポンプ車1台を使い、3号機の原子炉建屋に向けて放水。原子炉建屋の上部に向けて、毎分30トンの水を放水した。

一方、